

ギリシャ人の動物世界観とその構成¹⁾

ジャン・トランキエ*
(訳) 門田 眞知子**

The Bestiary of Ancient Greece and its Organization

TRINQUIER Jean
KADOTA Machiko

キーワード：動物, 神話, 宗教, ライオン, 豹, 狼, 熊, 猪, 鹿, 野ウサギ, 蛇

Key Words : Animals, Mythology, Religion, Lion, Panther, Wolf, Bear, Boar, Deer, Hare, Snake

私の考察の起点は、オオクニヌシ神話と、そこで重要な役割を果たした動物、つまり白ウサギとサメです。サメの後には、たぶん別の動物であるワニが潜んでいます。というのも、策を弄して海を渡るという同じテーマがワニに対して行われるのは、東南アジアの神話の中で見る事ができるからです。この種の動物——ウサギとサメ——の姿は、古代ギリシャ文化においては、姿がないようです。古代ギリシャでは、ウサギは確かに価値ある狩りの獲物であり、ウサギ狩りは素晴らしい狩りであり、狩人と猟犬双方の知恵と敏捷さが求められる狩りでした。飽くことなく追い求められた獲物のウサギは、非常に多産で多情な動物であり、男色のエロティックな世界にも属し、彼らの恋の贈り物にもなりうる動物でした。²⁾

(パリのクリュニー美術館の15世紀末の)「一角獣と女性」のタピスリーでも見られるように³⁾、ウサギは常に性的な好色性と結び付けられてきました。ほかにはウサギはとりわけ卑怯さの象徴ですが、ギリシャ神話の中では、何ら役割は果たしていませんし、トリックスターとしても決して登場していません。サメに関しては、古代ギリシャ人はほとんど注意を払ってきませんでした。この二種類の動物の例を見ればわかるのですが、それぞれの社会は自分たちと接触する動物たちから何らかの動物を選択し、それらの動物たちにその社会の日常生活の中でとりわけ重要性を与えているように思われるということです。しかし、それらの動物は、フランスの文化人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースの有名な言葉を用いれば、「考える対象に値する動物」でもあるのです。この文化的に価値の高い動物の選別は、動物システムのようなものを構成し、その構造の配置の法則を引き出すことは適当だと思われます。この考察の目的は、最も象徴的な動物を通じて、古代ギリシャの「動物世界」の構成を分析することです。

この動物世界の確立と定着にあたっては、ギリシャ文化の創立的文献としてのホメロス(紀元前8世紀)の叙事詩が決定的な役割を果たしました。一連の比較の中で、日常生活の中でのさまざまな場面は、この叙事詩の主要な行為の証人の役割を果たしています。これらの比較の中では捕食の場面

* パリ・エコール・ノルマル・シュペリユール准教授

** 鳥取大学地域学部教授

があり、それらの場面は戦いの英雄的な荒々しさを言うものとなります。動物世界は、こうして好戦的で闘争的で攻撃的な動物と、他方には、弱くて、怖がりでほとんど非戦闘的な動物とに区分できます。この区分は、貴族的で戦闘的な人間社会の価値観にも対応していますし、とりわけ古代ギリシャの動物世界を構成するものです。二つ目の構造原理は、生息環境を基準にしてなされます。動物は三つの大きなカテゴリーに分類されます。1) 陸上動物, 2) 鳥類, 3) 水中動物。好戦的な動物と、非好戦的な動物は、これらのカテゴリーのいずれかの中に該当します。表1をご覧ください。

	Animaux terrestres 陸上動物	Animaux aériens 飛行動物 (鳥類)	Animaux aquatiques 水中動物
Animaux combattifs 戦闘動物			
Animaux non combattifs 非戦闘動物			

(表1)

この配列は、二重に階層的と言えます。戦う動物は、他の動物よりも、ずっと価値が高くなりますし、陸上動物と空中動物である鳥は、水中動物よりも価値が高くなります。実際、第一線を占めるのは、好戦的な陸上動物ということになります。

今、この表の欄の中を満たすと次のようになります。(表2)

	Animaux terrestres 陸上動物	Animaux aériens, oiseaux 鳥類	Animaux aquatiques 水中動物
Animaux combattifs 勇猛かつ戦闘動物	lionライオン (panthère, loup) ヒヨウ, 狼 (ours) 熊 sanglier 猪 (taureau) 雄牛	aigle ワシ (coq) 雄鶏	dauphin イルカ
Animaux non combattifs 非戦闘動物	cervidés 鹿 lièvre うさぎ	colombe etc. ハト	

(表2)

これらのカテゴリーの中で、ライオン、ワシ、イルカは、首位の座、王位にあるといえます。私の考察のつづきは、紙数の関係で陸上動物のみに絞りたいと思います。

ライオンは、これらヒエラルキーの頂点に位置し、まさに百獣の王です。これらの動物のうち、外からやってきた(エキゾチックな)動物は全くいません。これらの動物はすべて、ギリシャ空間に居た土着の動物なのです。

このことで、ライオンについてもう少し詳しく述べましょう。ライオンは、ミケーネ時代(紀元前2千年)には、ペルポネソス(ギリシャ南西部の半島)にまだ生息していました。ネメアのライオンの神話では、文明の英雄であるヘラクレスが、首を絞めて退治したという話がこのライオンへの記憶をと

どめています。西暦5世紀前の古典時代には、ライオンは、いわゆるギリシャでは、ピンデ、オリンポス、マケドニアの山岳地帯にしかもう生息していませんでした。小アジアではまだライオンは見られました。いなくなったとはいえ、少なくとも初期の頃には、ライオンは明らかに後退してはいましたが、土着の動物としてギリシャに存在したわけです。ですから、ギリシャ人にとって動物の中でのライオンの優位は、古代のギリシャ人がライオンについて直接知っていたことによって説明されるだけでなく、さらにライオンが君主の人格と密接に結びついた王者的な動物であったような近東やエジプト文化の影響によっても説明されるのです。ライオンはこうして寓話の領域でも最も重要な役割を占めています。それと東洋の文学との関係は明らかになっています。

百獣の王としてのライオンは、ギリシャでも他の捕食動物を凌駕していました。しかしギリシャの動物界では代表的な存在として、家畜の群れに限りなく危険な動物すなわち狼がいますが、狼はライオンとの位置では少し遠のきます。狼もまた、確かに戦闘的な価値を具現していると言えますし、曖昧ではあるのですが、狼は、アポロン神と結びついているのです。とはいえ、狼は、とりわけライオンの弱められた形のコピーともいえます。ライオンの孤高で高潔な武勲に、術策に満ちた狼の荒々しい流血の集団的な強奪が対応します。狼が集団で狩りをする事実は、ギリシャ人の目には、きわめて政治的な動物とうつりました。群れを成すのは、人間社会のイメージを与えますし、狼が形成するのは、墮落した都市、悪漢の社会です。孤高の狼については、リュウカオンの神話におけるように、きわめて高等な野蛮の姿を具現しています。ペロポネソスの中央の山岳地帯であるアルカディアの初期の王であるリュウカオンは、リディアの山の聖壇で、ゼウスに捧げるために、自分の子を犠牲にして食したため、神の中の神ゼウスに罰せられ、狼に変えられました。冒涇へのゼウスの罰を象徴する狼への変身により、リュウカオンは、野蛮の奈落へと決定的に陥るのです。孤高の狼は、またギリシャ人にとっては、自らの欲望を充足させるために同胞を虐殺する暴君のイメージでもあります。

ライオンの存在でいささか影の薄くなった動物として、茶熊³⁾があります。しかし、北ヨーロッパのさまざまな伝承とは逆に、ギリシャ神話の中では大した役割は果たしていません。確かに熊狩りは、男性的で武勲の高い狩りです。とはいえ、ギリシャ語での熊は、女性として考えられたり、とりわけ女性的に言われる動物であるのは事実です。熊のすみかでの冬籠りには、その間に雌は子供を産みますし、そのことから、生命と再生(誕生)のサイクルの時間と関係をもった動物なのです。神話の領域では、狩りの女神であるアルテミスの怒りを買って熊に変えられたのは、カリストという女性——男ではなく——です。

捕食動物だけが好戦的な動物のカテゴリーの代表者ではありません。というのも、このカテゴリーには角を持ち、攻撃者に対し角で激しく防衛する動物も含んでいるからです。特に猪の場合がそうです。ギリシャ人の目には、猪は、戦いと勇敢さ、情熱、激しさ、そして抵抗の一連の価値を具現するものなのです。ホメロスの叙事詩との比較の中では、猪はライオンの敵としてふさわしく、ライオンと同じくらいの武勲をもつのです。猪を恐るべきものとして敵視するのはライオンだけではありません。文化を破壊する怪物のような猪を死に追いやることができるものとして、ヘラクレスやテーセウスのような文明的な英雄も数えられるのであって、猪に死を与えるのは彼らに赦された武勲なのです。ライオン狩りと共に、猪狩りは、最も威厳ある狩りでした。猪を死に至らしめることこそが、まさに真正正銘の危険な武勲でした。それは、男性の成人儀礼の価値を持つものでした。猪狩りについては、アイトリア地方のカリュドンで繰り広げられる猪狩りは、メレアグロスの神話においては中心的な位置を占めます。これは、イニシエーションの失敗した話のように読めるでしょう。母方の叔父たちと怪物的な猪退治に出かけたメレアグロスは、猪をやっつけるのですが、その皮を誰

が得るかで争いになり、メレアグロスは叔父を殺します(皮は狩りの貴重な勝物品です)。マケドニアでは、動物と人間の戦いで、猪を素手で殺さないうちは、宴会に加わる権利を持たないという風習があったようです。

ついで鹿狩りですが、これは二次的な役割しか持ちません。古代ギリシャでは鹿はあまり高い地位にありませんでした。鹿はむしろ雌鹿であり、それは狩りの女神であるアルテミスに結び付けられました。

要するに、ギリシャの動物世界では、なんといってもスターはライオンです。王者の中の王者なのです。ライオンは、その巧みな素養において、熊や狼も含め他の捕食動物の存在を消してしまうのです。ギリシャ人の動物世界の中で、その重要性からライオンに近い唯一の動物は猪です。距離を置き支配するのが適当な野生の具現という点からも、勇敢な美徳の象徴の点からも。

2013年は特に巳年ですから、蛇について一言つけ加えます。蛇は、特に脱皮しながら生まれ変わるという能力や、地下に住まう力などによって、またときにはその危険性や猛毒性によって、ギリシャ人たちを惹きつけました。ギリシャ神話は、蛇に重要な位置を与えました。それは、蛇の本性と蛇の機能の二つの観点から検討できるでしょう。蛇そしてギリシャ神話によって演出された蛇形の生き物の大部分は、大地の息子という本源的な存在として現れています。蛇はよく、番人としての機能を発揮します。領土の、水源の、泉の、木の、宝物の、魔法の監視者としての機能です。この二つの特徴——本源的な性格と番人としての機能——から、なぜ蛇が地上の文明の英雄たちと同じくらい、天上の神々とししば敵対者になるのかが分かります。大地の息子であり、本源的な存在である蛇は、時には姿を消して、オリンポスの神々の秩序ばかりでなく、(地上の)都市の秩序として新たな秩序に場所を譲るのです。場所の、泉のあるいは宝物の番人である蛇は、英雄の前に立ちはだかる障害物ともなり、英雄に資格を問う試練をも与えるのです。

蛇は、とはいえ、いつも敵対者ではありません。有益な蛇もいるのです。医療神、アスクレピオスの医療の祭祀の中では重要な役割を果たします。蛇は、アスクレピオスの属性です。アスクレピオスの祭壇では、蛇たちは自由に生き、神の有益な補助者とみなされているのです。蛇たちの夜の徘徊から、眠っている病人の回復を助けているとみなされてきました。眠っている病人たちは、神が夢の中で彼らのところに現れるのを待っていたのです。

以上、少し図式的に簡潔に、ギリシャ人にとって西暦前8世紀から古典時代まで、またその後に至るまでのギリシャ人の動物世界を組織立てている力のアウトラインを述べました。実際、時間をへだてて、動物世界が大きく安定してくることは明らかですし、ライオンの後退には時間がかかりました。ライオンはギリシャの平野や山岳地帯から次第に消えてゆきましたが、しかし、ギリシャ人文化の心底には、いつまでもライオンの存在は、しっかりと刻み込まれているのは事実です。



(訳注)

- 1) この講演要旨は、去る2013年1月12日(土)、とりぎん文化会館第一会議室で鳥取大学地域貢献支援事業として行った国際神話シンポジウム「古事記ワールド その3 -古事記の動物神話と世界の動物伝承-」での講演記録である。原題は <Le Bestiaire des Grecs et son organisation>。フランス語による講演。ジャン・トランキエ氏は、パリ・エコール・ノルマル校の准教授で、ギリシャ・ローマ文化史が専門である。平成24年度鳥取大学学長裁量経費で招聘した。韓国からは『古事記』を訳された、魯成煥（ノソンファン）蔚山大学教授もお招きし韓国の兎の事情をお話頂いた。
- 2) 会場では日本からの招聘者、比較神話学の吉田敦彦氏から、兎は、ホモセクシュアルの恋人の間でのプレゼントとなっていたという補足説明を頂いた。
- 3) フランス語では、飼うウサギは lapin、野ウサギはlièvreと区別する。「因幡のシロウサギ」のフランス語訳は、<le mythe du lièvre blanc d' Inaba> であるが、一般にラバン(lapin)の語彙の方が普及しているのでこちらの訳語を用いている。どちらも男性名詞である。
- 4) 勿論ギリシャを含むヨーロッパには、「茶熊」しか生息していないのでこのように表現するということである。

(2013年2月1日受付, 2013年2月14日受理)